カトリック仙台教区報

2010年9月5日　No.195
発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

一人ひとりが信仰共同体の一員として…
第38回カトリック宮城県大会

今年の宮城県大会は「共に知り　共に歩もう」をテーマに7月4日(日)仙台白百合学園レジナ・パーチス・ホールを会場に行われ、500人余が参加した。

今年2月に行われた宮城県研修会では、仙台教区の現状を知ることに主眼が置かれ、平賀司教は、基調講演で教区の現状について話された後、教会と交わりを持つことの大切さに触れ、「私たちが教会なのです」と強調された。

「私たちの教会」には、教区が関わっている事業、教育、医療、社会福祉関係の団体があり、また、様々な事業に取り組んでいる修道会もある。これらの諸団体や修道会の活動そのものが福音宣教ではないか。学校では毎年入学してきた学生にキリスト教精神を教えている、医療・福祉ではキリスト教精神をもって患者の方々に接している、さらに重要なのは、これらの活動に従事している方々の大半は信徒ではない、このような事実を知り共有し、協力していくことが大事である。

そこで今回は、宮城県内の事業や、教区内の施設、修道会に現在の活動内容を発表していただき、それを理解することで、私たちの生活に生かし、共に歩む一助となるようテーマを「共に知り　共に歩もう」としたとの趣旨であった。

発表は、1団体5分程度でスクリーンに映像を映しながら創立の過程や主な活動について説明した。

昼食をはさみ、13時30分から、大会ミサが平賀司教主司式のもとにささげられた。

平賀司教は、説教で、「キリスト者にとって『共にいる』ということは当たり前のことである。『人を大切にする』ことをキリストは十字架によって示してくださいました。共にいて、共に知り、共に歩むことは、キリストの十字架を示すためです。十字架の他に私たちにとって誇れるものはありません」と、それぞれの活動や事業が、その団体の存続や発展のためにあるのではなく、キリストの十字架を示すという根本を忘れてはならないと話された。

修道会や、カトリックの各種の団体の活動内容が詳しく発表されたことで、よく理解できたし、身近なものと感じることが出来、とてもよかったという声が多かった。今回発表出来なかった団体についても、今後何らかの方法で周知できることが望まれる。

会場の廊下では、種々のグループがバザーを行っており、休憩時間を利用して買い物をしている様子も見られた。中高生会や教会学校の子どもたちは、午前中別のプログラムで楽しい集いを過ごした。

【以下発表した団体と主な事業】

オタワ愛徳修道女会…病院、老人ホーム、小教区、保育園、養護施設に会員を派遣、団体の黙想会等に修道院を開放している。
シャルトル聖パウロ修道女会…学校法人仙台白百合学園（幼、小、中、高、大）。
聖ウルスラ修道会…八戸聖ウルスラ学院（幼、中、高）聖ウルスラ学院英智幼、小中、高。教区、小教区への奉仕。
聖ドミニコ女子修道会…聖ドミニコ学院（幼、小、中・高、北仙台幼）。児童養護施設仙台天使園、ドミニコの家青野木。
聖パウロ女子修道会…書籍出版、書籍販売（聖パウロ書院）。
社会福祉法人カトリック児童福祉会…社会福祉施設運営（暁星園・あけの星荘・パルシア）保育事業（金ヶ瀬カトリック保育園、川渡カトリック保育園、古川東町カトリック保育園、米川聖マリア保育園）。
財団法人 光ケ丘スペルマン病院…内科、小児科、産婦人科、リウマチ膠原病内科、ホスピス（緩和ケア科）。

生命の泉

▼足立区の101歳の老人の白骨化した遺体が見つかった事件に衝撃を受けた。それから連日のように各地から置き去りにされて亡くなっていた高齢白骨遺体が報道されている。その方々にはずっと年金が支払われていた事実が明るみに出て、遺族の詐欺行為に発展している▼1967年深沢七郎が、米の取れない貧しい村を舞台に老婆を山に捨てる話し『楢山節考』を発表して話題を呼んだが、今度の事件は形を変えた「楢山節考」ではないか。今日では、老人を捨てるのに山ではなく家に置き去りにするか、年金などで、老人に使い道があれば死んでも不労所得で家族に恩恵をもたらすか▼日本の近代化の担い手は都会に出てきた地方出身の若年労働者で核家族を形成した。核家族の中に一人でも増えれば大問題だ。逃げ場のない人間関係の中で、お互いに無関心を装い、独り暮らしも多くなっている▼日本にキリスト教が入って来てからつい最近まで宣教はまず家族からと考えてきた。結婚に際しては相手も信者になるように勧めてきた。しかし、昨今信仰は個人の問題として結婚成立の要件ではなくなってきた。信仰が家族のアイデンティティを育んで行っていないとき、信徒が死ねば「一粒の麦が一粒のまま」で家族の中に信仰の痕跡も残さない▼私たちの教会がいかにして孤立の人に届くような宣教方法を生み出していけばよいのか。「人が独りでいるのは良くない」と教えられてはいるが、関わり合って生きてゆくには長いトレーニングも必要だ。核家族にはその力がない。（守）

2009年度　仙台教区決算報告について

仙台司教区会計　小松　史朗

去る、6月28日開催の責任役員会において2009年度仙台教区決算報告が承認され、7月31日付けで各小教区に2009年度仙台教区会計報告をお送りすることが出来ました。

これもひとえに各小教区の会計を担当して下さる方々の尽力の賜物と感謝しております。有り難うございます。

さて、昨年度の決算報告において、信徒の皆さまにご説明しなければならない例年と変わった状況は特段無かったと存じますが、ここ数年の傾向と致しまして維持費納入者数が減少している点が気に掛かります。各小教区毎に工夫した取り組みをお願い致します。それから、この4月より仙台教区に待ちに待った神学生が誕生しました。教区の神学生は信徒の皆さまが協力して下さる司祭召命活動（旧一粒会）から養成に掛かる費用を賄っております。司祭召命活動に関しても今後とも、より一層のご理解とご協力を併せてお願い申し上げます。

ハンセン病問題の根深さと人権回復の緊急性

司教　マルチノ平賀徹夫

2008年12月10日、日本の司教団は「すべての人の人権を大切に」というメッセージを発表しました。世界人権宣言採択から60年となる機会に合わせてのことでした。仙台教区人権を考える委員会は、神の似姿として造られた人間一人ひとりの人権がないがしろにされている現実はないか、問題が見えたときには、一緒に考えていただけるように教区に発信することをめざしていますが、この司教団メッセージによって一層の刺激を受けたところでした。

メッセージで司教団は、「貧しく弱い立場に追いやられ、大切な人間関係を断たれてしまっている人々、人間らしい生活が損なわれ、あるいは妨げられている人々の側に立って、この世界を見ていかなければなりません」と指摘しています。このような状況は大なり小なりきっとどこにでもあるので、それに気付き、弱い立場にある方々との関わりを深める働きをしておられる信者の方々もおいででしょう。そんな中で、最も深刻でまた緊急性を帯びている問題の一つがハンセン病問題です。百年も前から、国の政策としてハンセン病患者は強制的に収容・隔離され、患者もその家族も一般社会から大変な偏見・差別を受けてきました。文字通り「貧しく弱い立場に追いやられ、大切な人間関係を断たれてしまい、人間らしい生活が損なわれ、妨げられてきた人々」です。人間としての権利を奪われてきたその方たちが声を上げています。

元患者たちによる国家賠償請求訴訟の勝訴（熊本地裁）などを経て、2008年にはいわゆる「ハンセン病問題基本法」が成立（09年4月1日施行）しました。しかし、法の成立で片付いたとは言えない問題の根深さはずっと残っています。さらに、療養所入所者の平均年齢が80歳を超えた今、その法に基づく人権回復の施策遂行は極めて緊急性を帯びています。だのに現実には「立ち枯れ政策」と皮肉られるほどに進んでいない状態でもあります。見ぬ振りはできません。司教団メッセージは「この小さくされた人の視点が欠けているとすれば、たとえ悪意がないとしても、それは、ある程度の人権侵害はやむを得ない、とする側に立つことになってしまう」とも警告しています。

WYDマドリード大会案内

2011年8月、スペインのマドリードでワールドユースデイが行われます。参加者の募集期間は、2010年8月　日から2011年3月　日まで。

日程はA・B、二つのコース。

Aコース＝2011年8月7日（日）～8月　日（火）（7日間）（現地集合＝スペイン・ビーゴ・現地解散＝マドリード）サンチャゴ・デ・コンポステーラ徒歩巡礼

Bコース＝2011年8月5日（月）～8月　日（水）（　日間）（日本出発・日本帰国）

A・Bコース共通日程＝　日～　日＝WYD本大会参加（マドリード、グアダラハラ）

参加資格は、高校生を含まない　歳以上5歳まで。

往復の旅費等について、今回は教区ごとの対応となり、正確な金額はまだ提示できませんが、わかり次第お知らせします。

WYD2011マドリード大会の詳細については、カトリック中央協議会ホームページ内の、WYD2011マドリード大会日本事務局公式ページをご覧下さい。

なお、教区内の連絡のために sendai75seinen@yahoo.co.jp　の、メールアドレスを作成いたしましたので、諸般の連絡はこちらにお送り下さい。

お急ぎの電話については、仙台中央地区(舟山)までお願いします。

カトリック元寺小路教会

TEL022（222）5507

参加者が殺到する可能性がありますので、早めのご連絡をお待ちしております。

司教日程　9月10月

9・1（水）人権を考える委員会
3（金）部落差別人権委・事務局会議
4（土）部落差別人権委・シンポジウム
5（日）カトリックの集い・青森県
9（木）部落差別人権委・定例会
11（土）仙台壮年の会黙想会
14（火）司祭評議会・教区司祭団役員会
18～19 正平協全国集会（札幌）
20（月）オタワ愛徳修道女会50周年
21（火）学校法人理事会
23（木）宣教司牧評議会・定例会
26（日）カトリックの集い・福島県
27～10・2 教区司祭団年の黙想会
10・3（日）十和田教会・堅信式
8（金）特別臨時司教総会、社会司教委
9（土）吉田昌民師司祭叙階金祝ミサ
10（日）弘前教会献堂100周年
12～13 道の司牧（東京）
18（月）宮宗法連研修会
21（木）学校法人理事会
23（土）聖霊刷新グループミサ
25（月）教区司祭団月例会

＝殉教地大籠を守る会＝
マリア像の塗り替えなどの活動

7月10日、「殉教地大籠を守る会」の今年度総会が大籠教会で開催され、これまでの活動状況が報告された。昨年10月の発足時、22名であった会員は現在80名を超え、順調に会員が増加している。

活動は通常の清掃・草刈りの他、大籠教会司祭館修繕計画に基づきマリア像修繕・塗装、教会の屋根・雨樋の修繕、教会の窓枠・ドアの塗り替え、司祭館壁面の塗装などの工事が行われた。特にマリア像の塗り替えにあたっては塗装自体は専門業者に依頼したが、塗り替えのための下地作りの作業である塗装剥がしは会員数人が数日間がかりで行うという熱の入れようだった。また、今年5月8日には守る会主催の巡礼が企画され、25名が参加。活動は物品調達など必要経費以外は会員のボランティアで行われているが、活動の資金は会費・会員の献金であることから、今後の活動を進めるためにもなお一層の会員獲得が望まれている。

（殉教地大籠を守る会　会長　佐野　督郎）

【写真＝上・塗り替えられたマリア像＝下・司祭館のペンキ塗り＝】

《神学院便り》
仙台教区神学生　佐藤　彰洋
「初めの一歩」

厳しい暑さが続く中、皆様いかがお過ごしでしょうか？

神学院（東京キャンパス）に入学してから3ヶ月が経ち、環境の変化と共に私の気持ちも少しずつ変化してきたような気がします。今回はその変わった環境の変化、生活について書こうと思います。

神学院の一日の流れは祈りから始まります。6時15分から朝の祈りがあり、その後にはミサにあずかります。朝食を終えて、9時から午前の講義が始まります。昼になると昼の祈りをして、それから昼食をとり、午後の講義を受け、夕方5時半から曜日によって違う祈りをします。聖体賛美式や教会の祈りの読書課、ロザリオの祈り、十字架の道行などをします。その後に夕の祈りをし、夕食を食べてから晩の祈りをして8時に全て終わります。初めはこの生活についていけるか不安もありましたが、一歩踏み出してみるとどうにかやっていけそうだ！と感じました。そんな祈りの生活が3ヶ月経った今では心落ち着くものになってきました。そのことを副院長との面接で話してみたら、「あなたを見ていると祈りに渇いているように見えるからそのせいかもね」と言われて自分が求めていたものが祈りだったのかなと思い、私のような者ですら祈りに渇いているのですから世の中にはもっと渇いている人がたくさんいると思います。もし自分もそうかも…と思ったらどうぞ、少しの時間でもいいので祈ってみてください。

招きにこたえて 30

【写真＝左上・東京キャンパス　右下・福岡キャンパス】

日本カトリック医師会・看護協会 仙台支部
第２回交流会を弘前で開催

6月20日（日）日本カトリック医師会（JCMA）・看護協会（JCNA）仙台支部の第二回交流会が青森県のカトリック弘前教会で開催された＝写真＝。主日のミサの初めに他教会・他地方からの参加者らに自己紹介の機会を与えていただき、温かい雰囲気の中で共にミサにあずかった。その後第一部の記念講演会が聖堂で行われ、約80人の聴衆を前にケベック外国宣教会のフォレ・エノ神父様が「幸せのおすそ分け」と題して話されました。自作のポスターを見せながら、〈人間とは人間から生まれたもの（これが人間であることの唯一の条件）〉〈人間は神様に望まれ、愛され、創られたもの（無条件で望まれ愛された私たちは幸い）〉〈人間は苦しむもの〉〈人間は助け合うもの〉〈人間は死の瞬間まで成長できる〉などの言葉にエピソードを交えて情熱的に語られた。中でも〈われわれ人間は死ぬべき「生きもの」ではなく、生きるべき「死ぬもの（死にゆくもの）」です〉〈今までの私は神様からの贈り物。これからの私は神様への贈り物〉などの言葉は特に印象的だった。

講演会の後、第二部として信徒ホールで交流会が行われた。弘前で集まりが持たれたのは初めてだが、佐藤敬先生（弘前大学医学部長）と奥様、北川理映子先生、境恵理子さんらが中心となり、この集いを用意して下さった。参加者は総勢22名、うちJCMA 14名（指導司祭の鷹觜神父を含む）、JCNA 5名（1名は重複）、司祭他4名で、地域別では青森から9名、岩手から1名、宮城から8名（司祭は除く）。支部長の藤村重文先生がこれまでの仙台支部の活動報告の後、自己紹介と近況報告。弘前大学医学部学生の小川哲也さんも参加し、大いに場を盛り上げてくれた。名簿上でしか知り得なかったメンバーと実際にお会いして、お話をすることができ、参加者にとり大変貴重な経験となった。同じ信仰を有し、一つの体に属するものとしての意識を新たにすることができた。今年築後100年を迎えた弘前教会の美しい写真をお土産に帰途に着いた。

（JCMA溝口由美子）

「祈り」の分かち合い④

今年の年頭書簡で平賀徹夫司教は、「『祈りに心を注ぐ一年』で信仰共同体作りを」と題して、祈るよう勧めています。これを受けて、「仙台教区報」ではこの一年「祈り」をテーマに紙上での分かち合いを継続していきたいと考えています。教区の皆様の投稿をお待ちしています。

～観想修道会 日々の祈り～

盛岡ドミニカン・ロザリオの聖母修道院
スール・マリ・セシール o.p.
中藤 光江

朝、起床のベルで目覚め、ベッドを離れてセルールの窓を開けると「ホーホケキョ、チチチ、ズズッデポー」と小鳥たちはもう朝の祈りを唱和。四十四田湖から吹いてくる緑の風を深呼吸して私の一日は始まります。

湖の向こう側には盛岡の教会と神父様方、信者の方々。そのずっと向こうには仙台の司教様と神父様方、そしてその向こうは…、と私の心は日本全国、いや全世界の教会と神父様方、信者の皆様、未信者の方々が入って来て、彼らのために今日一日をあらかじめおささげ致します。天の御父のもとにひとつに集い互いに助け合って喜びと幸せの世が早く来ますようにと。

この祈りの修道会に入会してはや44年…。高校時代に初めてカトリック教会に誘われてミサにあずかった時の祈りの響きは今も鮮明に覚えています。一人の男性の先唱にあわせて程よく溶け合った祈りの唱和は、赤紫のビロードのようで、天井近くにはまるで天使が舞っているかのようでした。

この時から、私は観想修道女になる道を歩み始めました。

「真理よ、あなたに出会うまでは、私の心は憩うことはないでしょう」と。朝の祈り、昼の祈り（三時課、九時課）、晩の祈り、寝る前の祈りと一日に2時間以上の教会の祈り。そして朝と夕に30～40分間の黙想、ロザリオの祈り、その他自由時間には個人的に祈ることもできます。日曜日、木曜日、金曜日には御聖体礼拝があり、御聖体の御前でイエス様と心行くまでお話を致します。召し出しを頂いた者にとり、この生活は本当に天国に近いものといえるでしょう。神に感謝。

ハンセン病問題を考える⑥

6月 日（土）シンポジウム「ハンセン病問題のこれまでとこれから～私たち一人ひとりにできること」を開催し、約 名が集まりました。

主催は「ハンセン病問題を共に考える市民の集い」。仙台教区人権を考える委員会もその一員です。はじまりは「真宗大谷派の知人が、仙台で東北新生園と共に歩むネットワークづくりのきっかけとして学習会をするから、カトリックからも参加しない？」というハンセン病市民学会青年部の友人からの電話。これを報告したところ、教区として委員会全員で参加することになりました。

一緒に仕事をしながら知り合おう、キックオフ企画としてシンポジウムを開催しよう。こうした準備を進める中、真宗大谷派やカトリックなど宗教者の集まりから、養護教員、療養所の職員、福祉関係者、国賠訴訟の弁護士なども参加する、ゆるやかなネットワークになりました。個人的なつながりをきっかけに、一つの企画を実現する中で関係を深め、ネットワーク化する方法は、青年活動と同じですね。何でも管理し、自分が理解できる枠の中に押し込めて、出来なさそうなことには反対する、という貧しい発想とは逆。目的をもった人だけでなく、ざわめきに通りかかった人が入ってくる。そこに、予想された結果だけでない思いがけない発見や、ネットワークが生まれる。そういう場を作ることは大切で、今回、この問題にかかわる地域の人たちが集まって、お互いの活動や顔の見えるゆるやかな横のつながりが出来たことや、新生園の方とも良い関係が出来たことなどは、大きな成果でした。今後の課題は、一般の皆さんとどうつながるか。お祈りとご協力をお願いします。

（仙台教区人権を考える委員会
御供 真人）

訃報

スール・アガト・マリ・ド・ラ・クロア o.p.
岡田 登女（97歳）
ドミニコ会盛岡ロザリオの聖母修道院
出身地 名古屋市
1913年1月 日 生まれ
1948年 月5日 初誓願
2010年5月3日 帰天

長年オルガン奉仕を務めた演奏者としての特質は、機知に富んだ生来の気質と共に高齢にいたるまで変わらず、姉妹たちを喜ばせた。お祈りください。

「縄文のこころ」

今、「この山麓には、いくつかの湧き水があって、山肌を伝わって流れてゆきます。

真夏の真昼のひと時ばかりは、白い光が輝きますが、そのような季節でも少し太陽が傾くと、水には藍の光が香りたつのです。秋になって山野にもみじが燃えても、冬になって白雪で蔽われても、常にそこには、この、言いがたい光がしみわたります。遠い昔にさかのぼる因縁なのでしょうか。」（「藍の水」押田成人著）

一人の修道僧（ドミニコ会 押田師）は、八ヶ岳山麓で湧き水に出会い、“縄文の心”に触れました。太古から湧き出る命の水を田んぼに引いて高森草庵を編み、人間の生の源を問いました。文明の虚像にふりまわされる人々に『藍の水』の存在を知らしめ、人の本来のあり方に立ち返らせたのです。

縄文時代は１万年以上も続いた日本の文化で、互いに争うことなく、食べ物を分かち、助け合っていたといわれます。“縄文のこころ”こそ大和の国の福音なのではないでしょうか。

聖ドミニコ会 Sr.佐藤 廣子

地球を大事にする会

仙台正平協「平和節」の取り組み

カトリック司教協議会では、8月6日（広島の原爆記念日）から8月15日までを「平和旬間」としているが、カトリック仙台正義と平和協議会（会長渡辺清）では、今年から、6月23日（沖縄慰霊の日）から、8月15日（敗戦の日）までを「平和節」として、戦争や平和のことについて学び、行動する期間とした。これについては、「カトリック新聞」の「声」欄や、「意見・異見・私見」等に全国から賛同の声が寄せられるなど、全国的に話題となっている。第1回「平和節」の取り組みを追ってみた。

6月27日(日)、「沖縄を知る集い」＝写真＝を開催、聖ドミニコ学院高校の生徒と仙台弁護士会の若手弁護士から沖縄体験報告を聞き、沖縄戦や基地問題について学んだ。

7月16日は、1945年のこの日、世界で最初の原子爆弾がアメリカの実験場で爆発した（それから20日後に広島、長崎に投下され数十万の尊い命が奪われた）ことに想いをはせ、19年前から「核廃絶と平和を祈るミサ」をささげ、全ての武器が世界中からなくなるように祈っている。8月7日には盛岡市の日本キリスト教団下ノ橋教会を会場に「平和講演会」を実施。仙台正平協の渡辺清会長は、国内で唯一の地上戦が行われ、その傷跡が今も深く残っている沖縄のことに心をとめ、沖縄のことから平和の祈りを始める必要があると強く感じていた。今回、「平和節」を新設したことで、札幌正平協や、さいたま正平協でも来年から「平和節」を新設するとの話を聞いている。全国の教会に「平和節」が広がっていくように願っていると談話を寄せてくれた。

平和旬間講演会 in 盛岡

8月7日、盛岡で、カトリック正義と平和仙台協議会は、キリスト者9条の会・宗教者9条フォーラムとの共催で、平和旬間講演会武田晃二氏（岩手大学名誉教授）講演「子どもの幸せは憲法理念と結びついてこそ！」＝写真＝を開催しました。平和の確かな土台としての憲法26条『普通教育』の理念を学びました。

『普通教育』とは、どの子どもにも等しく憲法で保障されている、人格の完成を目指す教育、人間を人間として育成する教育のことです。戦前の日本の教育に対する深い反省から、西欧の民主主義教育思想を取り入れて、定められました。「国民は、保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負い、義務教育は、これを無償とする。」と憲法に謳われています。26条は、9条や他の条文と深い統一を持ち、「平和」「人権」「民主主義」等、憲法の基本精神を共に構築しています。平和な社会の実現と子どもたちの幸福を保障する、素晴らしい理念が土台となっているのです。

ところが、2006年の教育基本法の改定は、憲法の理念に反し、「人間の育成」から「国民の育成」愛国心の強化へと論理を改変し、戦前に逆行するかのような内容となったのです。学校教育法など関係法規も改定され、教育行政の在り方、具体的な学習指導要領による教育課程の枠組みも変わりました。

学力向上政策のエスカレートは競争的な学校環境を生み。他方教科書が同じでも、学ぶことを求められている子と学ばなくてもよい子に分けられているという、教育にあってはならない差別と選別が行われています。これは子どもたちから、人間の尊厳を奪い、お友達との人間関係を踏みにじり、人格を破壊していきます。いじめや不登校、自殺の背景・原因が、この誤った教育行政にあったことに気づかされました。

差別教育が導く社会に、暗澹たる思いがします。人間は物ではないのです。国や企業の道具として育成してはならず、再び戦争の道具とさせてはならないと、祈り訴えたいです。

（盛岡上堂教会・上田吹黄）

ピタウ大司教著書紹介

ヨゼフ・ピタウ大司教は、上智大学の学長を務め、多くの学生たちに慕われていた。学長退任後、教皇ヨハネ・パウロ2世に呼ばれ、バチカン教育省局長などの要職に就いた。75歳の定年で退職し、2004年日本へ帰国した。大司教は、生まれ故郷のイタリアでなく、日本に帰国するということはごく自然なことと言う。かつて薫陶を受けた上智大のOBたちが、「ピタウ会」を作り、大司教の日本社会や若者への思いを記した著書を出来るだけ多くの人々に読んでもらおうと活動を続けている。

「愛ある生き方」と「時代の証言者」の2冊である。大司教の生い立ちから、家庭の在り方、教育の真髄など、深い見識で現代の日本に警鐘を鳴らしている。読みやすい文体で、読み進めるうちに「ピタウ・ワールド」に引き込まれ、納得することしきりである。

御希望の方は、「生活習慣改善センター」冨沢 伊勢雄（FAX022-268-4042）宛、氏名・住所・電話・注文冊数を記入してFAXしてください。2冊セットで2，000円（特価）（送料別）

子どもたちの夏

今年の夏は例年にない猛暑。そんな中でも子どもたちは元気いっぱい。教会学校の夏のキャンプは、楽しい思い出と共に神様への感謝の心を育んだ。

北仙台・畳屋丁・八木山合同キャンプ

猛暑にもめげず、7月31日（土）～8月1日（日）ドミニコの家に、総勢38名（子供21名）が集ったキャンプは、元気に大いに盛り上がりました。

今年は歌と手話による賛美を通して、子供たちがイエス様を身近に感じてほしいという願いがありました。短時間ではありましたが、練習を重ねるうちに力強い歌声となり、2日目のミサでは、素晴らしい賛美ができました。また、主日の福音「愚かな金持ちのたとえ話」を劇で再現してみました。楽しみながら難しい福音を体で理解してくれたのではないかと感じています。この2日間は、教会の枠を超えて子供たちが仲良くなり、同じ信仰をもつ仲間と神様を大切にした生活を送ることができました。子供たちの将来の目標ともなる若いリーダーやホセ神父、ブラザーロドリゴさん、神学生の佐藤さんらが全力で子供たちと関わって下さったこと、食事や細々したところに気を配って下さった方々に大変感謝しています。そしてすべてを支えて下さった神様に感謝！（佐々木いづみ）

日曜学校サマーキャンプ

東仙台・塩釜

今年も夏を迎え、8月1日（日）～2日（月）無事にサマーキャンプを行うことができました。親元から離れ、普段とは違った環境の中で始まったキャンプ。しかし、子どもたちは無邪気なもので1時間ほど一緒に外で遊べば初めて会う子どもすぐにお友達になっていました。本当に元気いっぱいな子が多く、子どもたちの笑い声と笑顔の絶えないキャンプだったという印象が残っています。たった一泊二日の出来事ですが、やはり子どもたちのみならず寝食をともにするということは大きな出来事です。その中で、今年はシスター方の快いご協力の内にオタワ愛徳修道女会に宿泊させていただきました。また、司教館を訪問し司教様にお話をしていただいたことも、子どもたちの大きな思い出になったのではないでしょうか。このキャンプで子どもたちはシスターや神父様方、リーダーや信者さんなど様々な出会いがありました。そしてきっと一人ひとりが神さまの愛に触れた事と思います。

ケガもなく無事にこのキャンプを終えられたことを感謝しつつ、また来年も子どもたちの笑顔が神さまのもとに集う事を願っています。

（相澤咲子）

日曜学校夏期キャンプ

（元寺小路・一本杉・西仙台・白石）

8月10日（火）～12日（木）の2泊3日の日程で松島自然の家で日曜学校夏期キャンプが行われた。元寺小路教会16名、一本杉3名、西仙台3名、白石教会からも1名の参加があり児童23名、中高生のサブリーダー2名、ホセ神父と神学生、Sr.長谷川、日帰りで小松神父やお母さんリーダーも参加した。

1日目は、野外炊飯でのカレーを作り、神父様や神学生がお化けに扮して肝試しのナイトハイクを楽しんだ。

2日目は、ホセ神父の「ミサとはどういうものか」のお話を聞き、「主の祈り」の手話を覚えた。その後は、カニ釣り。多い子は4、5匹も釣っていた。午後には、ネイチャーゲームで自然観察。自由時間に男の子たちはホセ神父とサッカーに興じ、ホセ神父の妙技に関心。夜は静かな雰囲気でのキャンドルファイヤーで神様の恵みに感謝。

3日目は、自然の中で、虫の声を聞きながら野外ミサ。

この3日間の経験で、子どもたちが自然の素晴らしさや神様がいつも自分を見守って下さることを感じ取ってくれたと思う。

（大津知明）

思い出いっぱいサマーキャンプ

一本杉教会　熊谷　凛（小4年）

今年も教会キャンプに参加させてもらえることになりました。大好きなホセ神父様と小松神父様とお友達がいっしょです。夏休みに入ってからずっと楽しみにしていました。

去年は地引あみで魚をとりましたが、今年はカニつりでした。手作りの竹ざおでカニをつりました。私はおおきいカニを二匹、小さいカニを一匹つりました。びっくりしたのは、ホセ神父様がカニを七ひきつったことです。じまんげにニコニコしているホセ神父様の顔がおもしろかったです。

「ミサを知ろう」という時間では、「二つの食卓」のお話をホセ神父様がしてくださいました。私はミサで共同祈願をさせていただきました。うれしい気持ちでいっぱいになりました。

キャンプに行けるようにしてくださった教会のみなさん、ありがとうございました。

各地から

福島県

堅信の秘跡を受けて　いわき教会　遠藤信乃

振り返れば5年前に当時　歳だった次男を骨肉腫で亡くし、生きる希望もすべて失い、死んでいるように生きていた私でした。

毎日、ただただ泣き暮れていました。

そんな時、フッと子ども時代にカトリックの幼稚園に通っていた頃のクリスマスに頂いた小さなマリア様の像が目に留まりました。

「あぁ…マリア様」一人子に先立たれたマリア様は、母として子を亡くす痛みを一番分かってくださる存在に思えました。

「マリア様の元に行きたい。教会へ行こう！」と泣きながら教会の門を叩いたのは2006年の暮れでした。

今でも初めて教会に行った日のことを覚えています。

「疲れた者、重荷を負う者はだれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ・　）という御言葉の通り教会には安らぎがありました。

教会に通うようになってから、心が穏やかになっていくことを感じました。

チェスワフ神父様の元で夫と共に聖書を学び、「小さきものの中に神はいる」ことが分かりました。

私たち家族は、骨肉腫で亡くなった息子の癌と闘う姿の中に、イエス様の姿を見ていたのだと思いました。

聖書の御言葉は心に響き、すべてすんなりと受け入れることが出来ました。

マリア様のお導きで教会に通いイエス様の元に洗礼の秘跡を受けることとなり、

「イエス様が来てくださったからもう大丈夫、泣くことはない」と安心して生きられるようになりました。

家族にも笑顔が戻りました。その後長男も聖書を学び受洗いたしました。

そして6月　日には堅信式がありました。

カトリックいわき教会では5名が堅信の秘跡を受けました。

主司式のマチルノ平賀徹夫司教様といわき教会の主任司祭のチェスワフ神父様のもとでの祭壇でした。

私たち家族は、夫と長男と共に3人で堅信式にあずかりました。平賀司教様が一人一人の肩に手を置き、私たちは聖霊を受けました。とても感動の堅信式でした。

堅信式では、肩に触れる平賀司教様の温かい手のぬくもりを感じながらP・ツァイシッグの言葉を思い出しました。

「自分の肩に神の手が置かれるのを感じるためには、まず、他人の肩に自分の手を置かなければ」という言葉でした。

堅信式を終えた今、これからは悲しみに暮れる人、重荷を負う人たちに、自分自身がその肩にそっと手を置いてあげられるような存在になりたい、そうなれるように努力していきたいと思っています。

宮城県

JCNA仙台「マリア祭」

JCNA（カトリック看護協会）仙台支部では、毎年恒例の黙想会とマリア祭を行いました。黙想会は、7月　日～　日、昨年に引き続きラサール会のロドリゴ・テレビーニョ先生を講師にお招きしました。

「私自身がキリストと出会い、人と出会うことを大切にし、私自身の人生と使命を生きるように一歩前に進む」という内容でしたが、先生のお話が大変奥深く、私たちは静かに自分自身を見つめることが出来ました。

マリア祭は、七夕祭りの日を病院で過ごさなければならない患者さん方のために、様々な催しを通して少しでも楽しんで頂きたいという思いで続けております。

今年のマリア祭には、平賀司教様がおいで下さいまして患者さんやご家族のために心温まるお話をしてくださいました。祝福は、司教様がお一人おひとりのもとへ歩み寄られ、按手してくださいました＝写真＝。涙を流して喜ばれるご家族が印象的でした。

今年のイベントは「音与会」の皆様によるギター演奏でした。リュート、ギター、マンドリンの優しい調べは、聴いている方々の心に響き、暫し夢の中へ誘われたようです。

夏の日の午後、司教様の御講話とギターの演奏に、心が癒されるひとときでした。（赤井聖子）

告知板

◆マザー・テレサ生誕100周年記念　パネル展
「マザー・テレサは生きている」

片柳弘史神父（イエズス会）撮影の写真展。（入場無料）全国巡回しているものを会津地域でご覧になれます。

3年に一度の学園祭も同時開催。模擬店、ステージ発表、小・中学生の皆さんを対象にした体験プログラムなども用意しております。

日時：9月12日（日）午前10時～午後3時
場所：会津若松ザベリオ学園中・高等学校
電話：0242－27－1970　学園祭実行委員会

◆日本カトリック医師会仙台支部・日本カトリック看護協会仙台支部主催　「こころを病む人と共に生きる」

現代のストレスフルな社会では気づかぬうちに心が蝕まれているかも知れません。自分が心を病んでしまったら、または隣人が心を病んでいたら…。自分自身を含めて、共に生きるために。

講師　　仙台青葉学院短期大学講師　赤井聖子
日時：2010年9月26日　11:00～13:00
場所：仙台司教区センター2階会議室(元寺小路教会)
会費：無料　　問合せ：赤井（090-1399-8575）

◆平和を求める講演会
「自衛隊や日米安保がなくなっても　憲法9条を守るだけで国は守れるのか」

講師：小林祥二神父（カトリック潮見教会主任司祭）
日時：2010年10月10日(日)10時45分～12時30分
会場：カトリック元寺小路教会大聖堂　参加無料
共催：カトリック労働者連盟（CWA)仙台地区
　　カトリック正義と平和仙台協議会

仙台教区年！2011

③信徒の社会奉仕

2011年7月から始まる「仙台教区年！」に向けて、仙台教区の歩みを振り返って見よう。

今回は、信徒の社会奉仕活動の様子を「炬火」1936（昭和11）年2月号から拾って見た。（原文は文語体・編集部要約）

◆郡山教会姉妹会の活動

1935（昭和　）年　月5日午前　時半より、聖マリア寮付属幼稚園と、市立小学校2校の貧困家庭の子どもたち　名を招いて子供会を開いた。

昼食に赤飯を配り、幼稚園児と教会学校の子どもたちの余興で、参加した子どもたちをもてなした。閉会前に菓子包みとおみやげを配り、みんなにこにこして家路に就いた。

招待された子どもの中には約

【写真上・赤飯に喜ぶ子どもたち　下・幼稚園児の余興】

名ほどの欠食児童がいた。一人の女の子が、赤飯を食べないので、声をかけてみたところ、「家に持ち帰って、両親にあげるのです」と答えたという。

この催事の費用は、姉妹会のメンバーが、市内の篤志家を回って寄付を集めたもので、ほとんどが教会外の方々の寄付によっている。私立学校の校長が、いたく感動して、教師1名を派遣し、金一封を差し出した。郡山教会主任司祭ラポルト師と、修道女4名も参加し、子どもたちの世話をした。

◆弘前教会信徒　米を寄贈

クリスマスの喜びを貧しい人々と分かち合おうと、信徒に「弘前カトリック教会」と印刷した袋を信者に配り、白米を入れて持ち寄ってもらった。集まった袋を市役所に持ち込み、食料に困っている人たちに配ってもらうよう依頼した。

◆恵まれない人々に愛の奉仕

仙台姉妹会の活躍　昨年　月1日の総会で、計画し、年の瀬を控えて生活に困窮している方々を救おうと、各自が分担した地域を回り、市内の信徒や一般篤志家の家を訪問した。市内教会では、この企画についてあらかじめ神父から説明されていたこともあり、皆喜んで協力した。集まったものは、着物、洋服、布団、防寒服、食料品、その他の小物類。

集まったものは5日に整理し、市の社会課を訪ね、課長と面接、姉妹会の精神と今回の計画と趣旨を説明したところ、大いに喜ばれ、市としても援助を惜しまないので大いに活躍してくださいとの言葉をいただいた。

7日、姉妹たちは元寺小路教会幼稚園に集まり、市から受け取った生活困窮者の調査カードにより各家庭に必要な物資選びを割り当てた写真[11]。またそれと一緒に仙台高女の愛之堂医院の無料診察券数枚と菓子詰め合わせ袋を添えた。

翌　日、寒風吹き荒れる中、市内外に散らばる対象家庭を訪問した。いずれも筆舌に尽くしがたいほどの惨状で、若い姉妹たちは初めてみる悲惨さに目を覆いたくなる思いだった。このような方々のためにもっと活動を続けて行かなければならないと痛切に感じた。

クイズ　昭和11年当時、現在の仙台教区内にはいくつの小教区教会があったでしょう？

【前回クイズの答え】

仙台教区で司牧した外国宣教会は4つです。

（パリ外国宣教会・ベトレヘム外国宣教会・グアダルペ宣教会・ケベック外国宣教会）

《告知板2》

～みことばを深く味わう集い～

「キリストにしたがって生きる」

とき：2010年9月23日(木)

ところ:聖ドミニコ女子修道会管区館

仙台市青葉区　　郎2－2－14

おはなし：ホセ神父(グアダルペ会)

対象：青年男女

参加費：５００円(お弁当代)

申し込み：聖ドミニコ女子修道会

仙台修道院　Sr.　木まで　9/16　切

TEL：022－225－1055

FAX：022－225－1105

E-MAIL：ed.yunoki@hotomail.co.jp

新刊案内

『神に聴く祈り　祈りのガイドブック』

著者　マラキー・ハンラッティ／訳者　金成彰子／発行　女子パウロ会／定価1200円＋税

本書は、長年、日本で宣教に携わり、2005年アイルランドに帰国した聖コロンバン会の司祭が、「祈りたいのですが、どう祈ればいいのかわかりません」という信徒の方々の切実な悩みに応えて、ご自分の実践なさっていた祈りの方法を、教え、指導されたことをまとめられたものです。「良かったことの祈り」として、多くの人々に分かち合われていたもので、すでに、人々が喜んで実践している祈りの一方法です。

私たちは、神様から多くの恵みが与えられています。しかし、それに気づかず、神様に感謝することさえしていない場合が多いのではないでしょうか。祈りは神に耳を傾けることですが、まず、「毎日、良かったことを振り返る」ことによって、次第にそれができるようになる、と本書は示しています。

この「良かったことを振り返る」ことから始まって、徐々に、神様からのメッセージを見つけていくことや、神様と出会うこと、「願いの祈り」、「ゆるし、ゆるされること」、そして、まず自分を変えていくことに導かれていきます。

この本は、個人としても、またグループとしても使えるようなガイドブックになっています。随所に、著者であるハンラッティ師の具体的な体験が書かれており、読者は、どのように祈ればいいかに、自然に導かれていくことでしょう。「分かち合い」の方法や、新しい祈りのグループの進め方なども、具体的に書かれており、役立つことでしょう。